

『フライブルクのまちづくりーソーシャル・エコロジー住宅地ヴォーバン』

第5章補足資料

住宅地の社会福祉的な取り組み、雇用の創出について

作成者：村上 敦

この資料は、『フライブルクのまちづくりーソーシャル・エコロジー住宅地（学芸出版社）』の第5章を補足するものです。この資料だけでは、あまり意味がありませんので、本と合わせてお読みください。

本書 232 ページ、注 30 より引き続き（ソーシャル+エコノミーの内容を補足）

とりわけ女性への配慮やバリアフリーといった社会福祉的な取り組み、ヴォーバン特有の職場の創出がここでは実施されている。この点については、本書では紙面の関係上割愛したが、以下に取りまとめてあるので、参照にしていきたい。

ソーシャルコンセプト

住宅地の社会福祉的な取り組みについて

ヴォーバン住宅地においてどのような社会福祉的な取り組みが行なわれたのかを一口で述べるならば、前節までの住宅の建設、あるいは土地の販売方法のところでも紹介したように、できるだけ異なり、多様な社会的背景を持つ市民がモザイク状に混入するように配慮したということであろう。ただし結果から述べると、こうした努力は、市民、行政、市議会とすべてが望み、強く推進したのにもかかわらず、成功しなかった。つまり、住宅地をよりエコロジカルに、そして住民参加などでより豊かに開発しようとするほど、そうした意義を十分に理解できる人びとがこぞって集まってしまったのである。であるからヴォーバンに集まった人びとは、市の上級職員であったり、大学関係者であったり、学校の先生、医者、建築家、税理士、エンジニア・・・といったいわゆるホワイトカラーで、比較的高収入の人びと、年齢でいうと子供がまだ小さな 30 代半ばから 40 代といった形となっている。政治的には、少し左寄りで、緑の党か社会民主党を好む。中には左党（Links Partei）を支持する人もいる。子供の教育には十分に関心があり、だからこそ車のないまちで子供を育てたいという思想を持ち、PTA 活動には積

極的で、議論をはじめると際限がない。人間としても成熟している。そんな人びとがヴォーバンでは支配的となった。皮肉といえば、皮肉な話である。

しかし、これはヴォーバン住宅地の開発コンセプトが間違っていたから発生した事態ではないだろう。賃貸住宅が主体でない分譲型の新興住宅地となれば多かれ少なかれ、ドイツ全土でこのような傾向が見られるわけだし、開発用の土地不足、住居難というテーマ¹を抱えるフライブルク市においては、そうした層が待ってましたとばかりここヴォーバン住宅地に集まってしまったのは仕方がないことでもある。問題なのは、ここで実現したような形で社会福祉的、エコロジカルな取り組みを実践した住宅地をこれまでの社会がほとんど提供しておらず、いまだに面的に広がっていないことのほうだろう。この先、20年も経過すると、このヴォーバン住宅地の世帯構成も変るはずである。ドイツ社会もヴォーバン住宅地のレベルに追いついているかもしれない。日本もこのような方向性に向かっているところが数多く出現するだろう。そのときに、ここヴォーバンがどのような住宅地になっているのかについては、私のひそかな楽しみにもなっている。



多くの家は路地で結ばれている。社会的な付き合いが発生する場所として。

¹ ここではあえて「問題」ではなく、「テーマ」という言葉を使った。開発用の土地をむやみに拡大することは自治体の方針としては短絡的で長期的には持続可能ではないと考えるからだ。

バリアフリーの実現と限界

現状がそうであるがゆえ、ヴォーバン住宅地のそれぞれの建物ではとりわけバリアフリーに力が入れているわけではない。高層でない建物で、経済力のある 30 代（つまり大方の場合は健常者になるだろう）や子供たちが生活する家に、バリアフリーを重点課題として考慮する必要があるのは自明である。とはいっても全くそうした配慮が行なわれなかったわけではない。いくつかの点では優れた事例があるもの確かなのだ。

まずは住宅地のほとんどがカーポートフリーコンセプトで作られているため、道路の多くは遊びの道路となっている。こうした道路では歩行者用の部分をわざわざ作る必要がなく、道路に段差はできない。つまり道の真ん中を歩行することが許され、車は最徐行でしか通過しない。マイカーと歩行者が同じ権利の道路が住宅地では支配的なのである。これは車椅子やベビーカー、あるいは歩行補助が必要な人びとにとって究極のバリアフリーと呼べるのではないか。さらにヴォーバン住宅地に限ったことではないが、フライブルク市の公共交通については、バスも路面電車も低床式で、乗り降りの際に段差がほとんどない。マイカーを排除したことで、通常の住宅地以上に公共交通との連絡、接続が優れている点も指摘できる。



(左) 段差のない路面電車の乗り口。(右) ヴォーバン通りの買い物ができるアーケード。

さらに買い物は住宅地内で、徒歩で済ませられるように設計の際に配慮されているし、住宅地内に数多くの職場を確保するため、弁護士、税理士の事務所から医師の診療所な

ども通常の住宅建物の地上階にくまなく配置されている²。現在は圧倒的に子供の数が多いため、小児科医、文房具店、子供服、子供預かり所、各種の習い事教室など子供向けの事業が目につくが、これらの業種は時間の経過と居住者の世帯構成の変化とともに移り変わってゆくはずだ。日常の用事は住宅地内で済ますことができ、職場も提供するマイカー交通を生み出さない環境コンセプト「ショートウェイシティ」は、社会福祉に優れたコンセプトでもある。

それでは、現在建てられた新築の住宅群が 20~30 年経過する頃に何が起こるのかを想像してみよう。まず高齢者が多くなった建物では、建物の改築を機にエレベーターが取り付けられることであろう³。ヴォーバン住宅地の都市計画では、壁面の建築線は厳しく定められているが、それぞれの世帯の入り口となる部分、あるいは階段部分は足場自立型で建設線から外出しすることが許されている。これは省エネルギーの観点から非常に優れた工法であると紹介したが、それゆえ外付けのエレベーターの取り付けが容易である点にも注目したい。例えば、築 70 年に近い旧兵舎を改築した市民会館ハウス 037 を例にとってみる。この建物は公共の建物であるのでバリアフリーが義務づけられている。通常そのような課題が発生すると、地上階入り口にスロープを取り付け、地上階からその上の階へ移動するには内部に大工事を施してエレベーターを取り付けることになる。

しかし、写真をご覧になればお分かりのように、設計の工夫一つで外付けのエレベーターを見事な景観をかもし出しながら取り付けることも可能だ。同時にこのエレベーターには、十分な広さの階段も取り付けられ、ベンチも置かれ、展望台の役割も果たしている。ちなみにこの兵舎の改築の設計は、ズーギーの生みの親であるボビー・グラッツが

² 住宅地区に商業設備や事務所などを織り込むという都市計画はドイツでも長年行われてこなかった。フライブルク市は、『ショートウェイシティ・コンセプト』、『都市の中心地と住宅地の中心街コンセプト』によって、こうしたこれまでの地区のゾーン化を明確に行わず、商業施設を住宅地中心に積極的に誘致、進出させている。これらは B プランで指定される。とはいえ、住宅付近に工場や大きな売り場面積を持つ一大商業施設が建つわけでもない。

³ ドイツの建築物は、木造であっても、ブロックや石積みであっても一般的に寿命を限定していない。つまり 20 年前後に 1 度の割合で内装、外装とリフォームすることを前提にして建物の躯体は半永久に使える資産として建てられている。改築の時点で新しい技術（例えば省エネなど）は取り入れられることが普通である。スクラップビルトが前提の日本の大部分の建築は資産にならない。従って、ドイツでは使い捨ての安い家というのはそれほど存在しないし、ドイツの持ち家率が低いのはこうした背景にもよる。

担当した⁴。ヴォーバンを訪れた方は、是非ハウス 037 の地上階に設けられたカフェのテラスでコーヒーを飲み、帰りがけにはエレベーターの展望台に昇り、階段の踊り場部分のベンチで小休憩しながら目の前の樹齢 70 年の菩提樹とその向こうに広がる住宅地を眺めて欲しい。段差をなくすバリアフリーという対策だけではなく、ソーシャル・エコロジーというコンセプトの深い意味が理解できるはずである。



(左) ハウス 037 に外付けされた展望台エレベーター。(右) エレベーターの中の注意書き：「飛び跳ねてはいけません！エレベーターに閉じ込められます！」。子供たちが展望台に上ることを許している設計なので、こんな注意書きが張り出されている。

女性のためのまち、子供のためのまち

フライブルク市の統計局は、ヴォーバン住宅地に限った人口動態を 2005 年 1 月に統計調査⁵している。その結果を見ると、人口の 3 分の 1 以上が 18 歳以下の子供であり、25 歳から 45 歳までの成人の数は 41.8%と圧倒的である。この若い成人のなかには兵舎を改築した学生寮の学生たちが含まれているものの、ヴォーバン住宅地はコンセプトの中では世帯構成、人口動態の多様化を目指したが、現実の結果は子供と子供を持つ親たちに占領されてしまったといっても過言ではない。

このような子供と子供を持つ親が集中するという傾向は、開発のはじまりから一貫して続いている。子供を持つ親が積極的に動いたからこそ、このヴォーバン住宅地では格別

⁴ 改築の設計に関してグラッツ自身が解説しているサイト：www.haus037.de/geschichte/das-konzept-von-1999。

⁵ 統計の詳細しくは著者が翻訳したフライブルク市の広報記事を参考に：2005 年 12 月 23 日号『子供！子供！子供！』：www.geocities.jp/freiburg2004report/。

な住民参加が行なわれたと解釈もできるだろうし、子供のための様々なコンセプトができたからこそ、子供を持つ親が集中してここに居を構えることを希望したとも言うことができる。子供についての恵まれた環境については、交通や緑の章をじっくりと参照して欲しい。子供のための数々の取り組みが実現されたことが分かるはずだ。この節では、女性、とりわけヴォーバン住宅地では支配的な小さな子供を持つ女性に対する配慮や取り組みを紹介する。

第 I 開発地区に新築が並びはじめた 1997 年 10 月、フライブルク市の男女同権推進課と州開発公社は、女性のためのワークショップを企画した。フォーラム・ヴォーバンもこれを支援している。住民参加の手法の中でもとりわけドイツでは一般化されている「未来会議⁶」がヴォーバン住宅地の女性のために 2 日間にわたって開催された。未来会議では、まず参加者のこれまでの過去を振り返りながら、過去の個人に起こった出来事と対象とするテーマ（この場合は住宅地の女性）を関連付けて分析し、その出来事を「残念に思う」のか、それとも「誇りに思う」のかを評価する作業からはじめられる。

この過程で会議出席者は、お互いに知り合いになり、同時に特定のテーマで同じ方向性の発展を望む共同体へと昇華する。次の過程では、同じ方向性の発展を望む人びとが現在進行中の事象、枠組み、現実を対象に再び評価を行い、その枠組み、事象がポジティブな誇りを持てる方向に進んでいるのか、あるいはネガティブな残念な結果に向かっているのかを解釈する。そうした過去と現状を踏まえて、実現可能かどうかは気にせず、未来にどんなことを期待するのか未来予想図（ユートピア）を作り上げる。このユートピアは参加者全員が共有できるものでなければならない。共有されたユートピアさえ作り上げられれば、あとはそのユートピアに向かって今から少しでも何かできることはないかを話し合い、1 つでも具体的なテーマやプロジェクトを発掘することができれば、未来会議は成功したといえる。こうして拾われたテーマやプロジェクトの実現については、もはや未来会議の役割ではなく、未来会議中で知り合いとなった人びとが自発的なワーキンググループを作って駒を進めてゆくのだ。

⁶ 未来会議など住民参加の手法についても、この一連のダウンロード・レポートで取り上げている。参照にされたい。

例えば、このヴォーバン・女性のための未来会議に出席した女性たちは、この新興住宅地に新たにできる幼稚園、小学校について、「モンテソーリ教育⁷」を導入することを強く希望している。さらに既存の住宅地に少数の子供が入居してくる場合とは異なり、ヴォーバンのような全く新しい新興住宅地開発の場面では、段階的に住民が増加し、それに伴って学校や幼稚園のクラスが追加で短期間のうちに次々と増加してゆく。学校や幼稚園のクラス編成や教師の数、施設の容量、子供同士の交流など様々な問題が発生することが想定される。したがって女性たちは、幼稚園と小学校を取りまとめた地に足のついたヴォーバン住宅地の教育コンセプトが作成されることを望んでいる。その他に、住宅地の端に作られた立体駐車場の夜間の安全対策、そして地域住民の力強い絆作り、子供の遊び場などのポイントが上げられている。

このように未来会議によって発展した女性たちの希望は、未来会議の席において設立された女性のためのワーキンググループが担当することとなり、少しでも住民が共有した「ユートピア」に近づくことを目標に動きはじめる。同時に、この未来会議で発展された「ユートピア」は、フライブルク市の都市計画局やプロジェクトグループ・ヴォーバンに持ち帰り、今後の開発計画の参考にする。ここで少しお断りしておきたいのは、未来会議という完成された素晴らしい住民参加の手法を用いても、特別で画期的、革新的なアイデアが次々と湧いてくるわけではないということだ。上述した女性たちが希望するポイントは、おそらく子供を持つ世帯が多い新興住宅地ならどこでも同じように望まれているポイントであろう。女性が持つ未来への希望は、世界中どこでもそれほど変わるものがなく、それは特別なことはない。つまり言い換えれば、女性は世界中どこでも同じような不利な環境に曝され、同じような問題を抱えているということだ。ただし未来会議は、単なる個人の希望を行政や開発側に述べる機会ではない。未来会議によって個々の希望は共同体の希望と一致するものであることが認識され、それを実現化するために共同体で第一歩を踏み出す行動が起こされる。ここに住民参加の手法の意義がある。そうして行動を起こしはじめると、おのずと異なるステークホルダーから成り立つネットワークが形作られる。このネットワークが作られること自体が何よりも大切なのであり、これを抜きにして自身の住宅地にアイデンティティを持つことはできないし、魅力

⁷ 19世紀のイタリア初の女性医師マリア・モンテソーリによって開発された新しい教育手法。もともとは障害児の教育、治療からはじめられた感覚教育という5感を刺激し、活用する教育方法だったが、今では世界的なオルタナティブ教育手法として認知されている。

的で活力あるまちづくりはできない。

未来会議開催の後、設立されたばかりの女性のためのワーキンググループは、住宅地内に住む（あるいは現在家を建築中でもうすぐ住むことになる）女性たちを対象にアンケート調査を行い、どれだけの割合の親がモンテソーリ教育をどのぐらいの強さで望んでいるのかを調査した。その結果を踏まえて、フライブルク市の学校担当局と州の教育担当省庁と協議を続けた。最終的に完全なモンテソーリ教育の小学校は実現しなかったが、それでも数多くのモンテソーリの教材と数名のモンテソーリ教育の知識がある教員をヴォーバンの小学校は確保し、通常の授業にモンテソーリ教育の要素を加えるという小学校の教育コンセプトが確立されている。もし、住宅地の女性たちが実際に動かなかつたら、この内容は自発的に自治体や州から発生することはない。

通常の住宅地であれば、不満の種となりえる「小児科医の不足」、「ベビーカー利用の障害」、「子供の一時預かり施設の不備」、「出産や育児の相談所の不備」などというポイントについては、すでに多くがフォーラム・ヴォーバンのソーシャル・エコロジーコンセプトの恩恵でヴォーバン住宅地では提供されていた（あるいはこの時点では将来提供される予定となっていた）。であるから、この女性のためのワーキンググループは、どちらかという学校・幼稚園の教育コンセプトに軸足を置いて活動を続けている。その他の分野では、行政に対して青少年（ティーンエイジャー）の遊び場を求める運動や、社会福祉事務所を住宅地内に作ることにしていた GENOVA との提携、「緑の帯」の計画に住民参加を導入するなど数多くの成果が上げられる。とりわけ、本来行政が考えていた「住民が入居する時点で緑の帯の公園が完成」という工程について、女性のためのワーキンググループは「住民が住みはじめてからその公園に隣接して住む住民たちが公園の計画を行うべき」だと主張した。これは、第 4 章で紹介したように完全に住民の望んだ形で実現されている。立体駐車場の設計も、夜間でも明るく、できるだけ閉鎖的な空間を排除したものに配慮された（第 2 駐車場であるアイスキューブは擦りガラス張りの設計）。この他にも 3 歳児未満の保育施設の設置やそのグループ作りにおいて、女性のためのワーキンググループは成果を上げている。

もう 1 つ、全く異なる取り組みとしてヴォーバン住宅地では自発的な女性たちの協同

組合「マザーセンター・菩提樹の花」が設立されている。これは、3組8名の子供を抱える親たちがカフェに立ち寄ったとき、あまりの子供の活発さにカフェ側から「ここは幼稚園施設ではないので、できればお引取り願えないか」と言われた出来事が出発点となった。子供を持つ親であれば、落ち着いてゆったりとお茶や食事をしたい人びとの邪魔になる心配をしたり、白い目で見られたりすることは1度や2度のことではないだろう。そうした親たちがいつでも気軽に集まり、子供を遊ばせておきながら、お茶をしたり、会話を楽しんだりする場所と運営を行うことを目的に、この「マザーセンター・菩提樹の花」は設立されている。もちろんマザーセンターという名前ではあるが、父親でもこの組織に加盟できる。

マザーセンターは、フォーラム・ヴォーバンと協議して2000年から市民会館の1室を決められた時間借り、いわゆる母と子の集いの場所を提供している。マザーセンターでは、子供の衣類（おもちゃ）の交換会や社会福祉に関する相談の窓口の開設、ベビーマッサージの教室や妊婦のためのヨガ教室、子供の工作教室など多様なプログラムを提供し、育児・出産の個人にかかる負担、圧力を軽減することに寄与している。私が面白いと思ったプログラムでは、「子供のためのヨガ・瞑想教室」、「授乳の集い」、「父親の集い」などであり、その他にも半ボランティアの理容師を招き入れて、子供の散髪を数百円というローコストで提供する試みなどがある。いずれも、見ず知らずの新興住宅地に越して来たばかりの子供を持つ家庭であれば、参加してみたいと思わせるプログラムだ。

このように開かれた子供を持つ親たちの集まりが組織化されることは、「公園デビュー」といったキーワードで象徴されるプライベート、半プライベートな圧力のかかる集まり（猿山社会）とは異なり、核家族化している現代社会においては多くの親にとって必要なことではなかろうか。もちろんその組織が公共の支援を受けていようと、受けていまいと、開かれているかどうかは、その組織を動かす人間次第であることは説明する必要がない。成熟した人間が数多く集まれば集まるほど、こうした組織は開かれたものになってゆく。

エコノミーコンセプト

住宅地での雇用と職場の創出

DIVA、古い建物に新しい職場を提供

お店という形以外にも、ヴォーバン住宅地では数多くの職場が創出されている。学校や幼稚園における雇用、住宅地内に点在している事務所型の職場（医療の診療所からマッサージ、会計事務所からアトリエなど）などである。また同時に、ヴォーバン住宅地では住宅地部分の北側に商業・軽工業用の用地が確保されている。エネルギーの章で紹介した地域暖房用のコージェネ施設もそこに置かれている。この商業・軽工業用地においては、これまでに大きなプロジェクト 3 つが実施されている。ヴィラバン、アマーバ、そしてディーヴァ（DIVA）と呼ばれる商業集積建物がそれだ。新築された建物で運営されるヴィラバンとアマーバについては次節で説明するとして、古い兵舎を改良したプロジェクト『ディーヴァ：DIVA⁸』をまず紹介しよう。

住民たちが頑なに取り壊しを拒んだ「3・5・1/4」プロジェクトの 3 棟の旧兵舎のすぐ脇に、もう 1 つ兵舎がたっていた。ハウス 050 と呼ばれる建物である。これら 4 つの兵舎は開発の計画がはじまる段階ですでに市議会決議で取り壊しが決められていたが、「3・5・1/4」プロジェクトでは、市議会が住民の立ち上げた財政コンセプトをよく吟味しないまま取り壊しを最終的に確認している。しかしこのハウス 050 においては、行政は取り壊しを回避する方向で調整した。行政のプロジェクトグループ・ヴォーバンは、ハウス 050 の購入を一般公募し、そのコンセプトと費用、そして確実性などを確かめた上で最も有利な条件の相手に、ハウス 050 を売却することにしたのだ。このハウス 050 の購入希望者の購入公募は 2002 年の年末に行われ、最終的には 4 つのプロジェクトが名乗り出た。この公募の中から採択されたのは、ヴォーバン住民が作り上げたプロジェクト「ディーヴァ（DIVA）」であった。「3・5・1/4」プロジェクトとは異なり、兵舎建物を住居とするのではなく、安価な賃貸方式の商業施設、つまり軽工業や事務所が入居する建物として活用するプロジェクトだ。フライブルク市としても住宅地内に雇用を発生させるためにこのプロジェクトは都合が良かった。ズージーを組織した

⁸ 商業・芸術・手工業ハウス・ヴォーバン：Dienstleistungs-, Kunst- und Handwerkshaus Vauban : www.diva-freiburg.de/.

ボビー・グラッツ、その当時のフォーラム・ヴォーバンを率いていたヨルク・ランゲ、アンドレアス・デレスケなどが、合資企業としてのディーヴァの財政コンセプトを固め、ズージー、ハウス 037 を設計したグラッツがここでも改築の設計図を仕上げている。具体的には 2003 年 11 月にディーヴァ有限・合資会社が設立され、市民から資金を調達しながら、改築を行い、事務所やアトリエ、手工業の仕事場として賃貸される売り上げによって、投資した市民に配当を与えている。ディーヴァは 2004 年 3 月には改装を終え、賃貸・運営を開始している。



(左) 兵舎を改築した商業・手工業ハウス「DIVA」。(右) 室内の様子 (出典：DIVA 撮影：www.diva-freiburg.de)。

ここでも新築でなく、改築によって多大なエネルギーが節約されたことを指摘しておこう。また、既存建物を改築することによって、かなり安価な賃貸事務所スペースが提供されている。フライブルク市には高価な事務所スペースはかなり余裕があり、どこでも金さえあれば入居することができるが、安価なスペースはまったく余裕がない。平均して 1 平方メートルあたり 6 ユーロという事務所スペースならば、アトリエなどの芸術活動、職人気質の手工業、個人零細事業でも十分に家賃を支払うことができる。同時に、このプロジェクトに出資した市民は、毎年出資金の 4%程度の配当を期待することができるのだ。ゲノヴァやズージーと同じようなオルタナティブな財政コンセプトのディーヴァは、賃貸先を募集しはじめてから 1 年間ですべての事務所スペースは埋まり、現在でも常に 95%以上の入居率という好成績で営業を続けている。

ヴォーバン住宅地のその他の職場

ディーヴァの他にも、ヴォーバン住宅地の北側の商業・軽工業地区には「ヴィラバン」、

「アメーバ」という商業センターが作られている。これらもユニークな建築方式が用いられているので、簡単に建物施設について説明しよう。

まずは 2001 年から建築家アウフターとブラークマンが構想した「ヴィラバン：Villaban⁹」である。当初はオリエンタルなバザーの雰囲気を取り込み天井が開閉する開放的な商業建物を構想したが、防火法の関係から現在の形に落ち着いている。このヴィラバンはアウフターら 5 つの事業者が出資した建築グループ式（コーポラティブ）の商業施設である。開閉式の天井は諦めたが、巨大な集成材をふんだんに使用するとともに天井を半透明の防水シートにすることで開放的な雰囲気を維持することに成功し、外観もドイツでは流行の原色をカラフルに配色している。2003 年に完成を迎えたヴィラバンには、ヴォーバン市民の移動を支える自転車を修理・販売する専門店「ラディッシュェン」、各種の芸術関連のアトリエ、家屋の内装・リフォーム業者、塗装業者などの手工業者が入居し、建築家自身もここに事務所を抱えている。また地上階部分には 110 平方メートルの大きさの畳敷きの大きなセミナールームが用意されており、ヨガ教室から空手、テコンドーなどアジア的な催し物が連日開催されている。入り口部分にはカフェと食堂も作られ、入居者以外でも気軽に利用できる住民の集いの場でもある。気になる賃貸料金は 1 平方メートルあたり 6.5 ユーロとそれほど高価でないのも住民密着型の商業施設としては重要なポイントだ。合計 20 の商業施設と 4 つの住居が総床面積 2,400 平方メートルに入居したプロジェクトである。



(左) ヴィラバンの外装。(右) ヴィラバンの吹き抜け部分は、芸術家たちの展示空間としても利用されている。

⁹ 正式名称は Villa Kunterbunt im Vauban : <http://bross.plan-b-freiburg.de/Projekte/VillaBan/villaban.html>。



ヴィラバンの自転車店「ラディッセン」はいつも人と自転車で賑わっている（人口千人あたり自転車所有台数が 850 台のヴォーバンでは当たり前ではあるが・・・）。そしてお店の前には、タイヤチューブの自動販売機が！ 日曜日に自転車店が閉まっても、大丈夫。いかにヴォーバンでは自転車が主力機関であるのかを象徴している。

またこのヴィラバンは、環境銀行¹⁰の融資によって成立している。環境銀行は、持続可能な環境保護プロジェクトのみに投資、融資を行っている銀行で、ニュルンベルクに本店を構えている。このようにヴォーバン住宅地ではドイツ中の環境関連事業者が複雑に絡み合いながら進出している。

ヴィラバンの隣には、同じ建築家グループが設計した「アメーバ：Amoeba」が 2005 年に完成している。名前から連想されるとおり、正四方形のヴィラバンとは対照的に、この建物は外観や間取りがすべて曲線で設計されている。またカラフルな配色のヴィラバンとは対照的に、黒い森の伝統工法シンデル¹¹で外壁を覆い、曲線形の突飛な建物を無垢の木が優しく包んでいるのが見所だ。この建物には合計 10 の医療の診療所、家具

¹⁰ Umweltbank。1994 年に設立された銀行で、現在では 135 名の従業員を抱え、資本金は 5,100 万ユーロ。5 万 2 千名の顧客を抱え、年間 8 億 1 千万ユーロのバランスシートを動かす環境保護にのみ投資を行っている銀行：www.umweltbank.de/。

¹¹ ヒマラヤスギなどを割いたものをうるこ状に貼り付けた外壁材のことで、日本では杉板ぶきといえは分かるだろうか。ちなみにドイツではこのシンデル（≒へぎ板）を割く職人をシンドラーと呼び、今日でも苗字に利用されている。

店、コンピューター専門店、4つの住宅が入居している。総床面積 2,500 平方メートルのアメーバと、二卵性双生児の兄貴分ヴィラバンにも、ヴォーバン住宅地を訪れた方は足を伸ばして欲しい。省エネや資材の 1 つ 1 つにまでこだわるエコロジカルな建築の多様性が十分に堪能できるはずだ。



注：この先、本書では 232 ページからエコノミーコンセプトの内容を補強して紹介してゆきます。